一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（六十点）

「さくら子って小学生のころから箏と三味線を習ってるだろう。だったら日本文化が大好きなクリス先生のお別れ会に演奏をプレゼントしたらいいじゃん」

ⅰ唐突に名前を出されたさくら子は、声を詰まらせておろおろしていた。なにか返事をしなくてはと焦っているようだったけれど、涙のほうがさきに出てきた。それを見かねた小倉先生が眠人に頼んできたのだ。

「なあ、浅倉。遠山といっしょになんか弾いてやってくれよ。コラボレーションってやつ。遠山も誰かといっしょなら心強いだろうからさ」

あの日、さくら子はいいとも悪いとも答えず、眠人が「別にいいですけど」と応じたことで決定事項になった。もともと眠人もお別れ会で*三線を弾く予定だった。クリス先生が眠人のことを沖縄ボーイと呼んでかわいがってくれていたから。

お別れ会は体育館で催される予定だ。出し物は壇上で披露するらしい。選曲はわけあって*『じんじん』にした。さくら子とふたりきりだと先行きが不安なので*竜征を巻きこんだ。それで竜征が二組までやってきて打ち合わせをしていたというわけだ。

五時間目の授業は地理で、社会科教師である担任の小倉先生が教えてくれる。今日は世界の気候について。給食後の授業なので眠たくてしかたがない。まぶたの重さに耐えながら窓の外へ目をやると、どんよりとした六月の空が広がっていた。教室内は蒸し暑い。肌が汗ばみ、自分の肌ながらべたべたとして触れたくもない。

「今日はここまで」

小倉先生の声で我に返り、なんとか授業を耐え抜いたことに気づく。脱力して机に突っ伏すと、さくら子を心配する小倉先生の声が聞こえてきた。

「遠山はさ、浅倉と三組の星野といっしょでやりにくいことはないか？　厄介なこととかあったら遠慮せずに先生に言うんだぞ」

「先生、やさしい」と田中がⅱ茶々を入れる。女子の声が続いた。

「先生はさくら子を贔屓してるからね」

「いやいや、先生は贔屓なんかしてないぞ。遠山を心配してるだけだぞ。だって浅倉と星野とトリオを組むんだぞ。心配に決まってるじゃないか。朱に交われば赤くなるって言うだろう。①遠山は肌が白いから、すぐ真っ赤に染まりそうじゃないか」

教室内に突発的な笑いが巻き起こる。「言えてる」とか「そのままのさくら子でいてくれ」なんて声も聞こえた。

実際のところ贔屓という指摘は［X］を射ている。というよりこの二組の誰もがさくら子を大切にしていた。みんなすぐにさくら子をかばう。ただ小倉先生は贔屓と言われてⅲばつが悪かったのだろう。眠人と竜征の名前を出して話をそらそうとした。標的を差し出して自分は逃げたってわけだ。

学校は寄ってたかっての場所だ。「いいなあ、いいなあ」と寄ってたかって人をうらやみ、寄ってたかって「ばかじゃねえの」と嘲笑い、「そういうのよくないと思います」と寄ってたかって攻撃する。それは先生に対しても同じであって、最近覚えた難しい言葉を使えば多勢に無勢では先生でもどうにもできないわけで、竜征や自分を生贄に差し出して逃げるしかなかったのだろう。でもそれって教師としてセコい気がする。

「眠人、さくら子に変なこと教えるなよ」

②田中があっさりと小倉先生の作戦に引っかかり、眠人を指差して冷ややかに言う。クラス中の視線が眠人に集まった。こちらを窺うさくら子の視線もあった。眠人と目が合うと、さっとそらした。

小倉先生は「朱に交われば赤くなる」を、悪い人と交われば影響を受けて悪くなるという意味で使った。竜征や自分を悪い生徒というaゼンテイで話した。そのことをさくら子が否定してくれてもいいのに。せっかくお別れ会でいっしょに演奏するのだから。これから仲間になるのだから。

さくら子はうつむいたまま固まっていた。一列はさんだ眠人の席からでも、さくら子の瞳に涙が溜まっているのを確認できた。すごい表面張力だ。なんて感心していたら、ぽろっと涙の玉がこぼれてスカートに吸いこまれた。

まあ、無理だろうな。小倉先生やクラスメイト全員の前で、さくら子が人をかばう発言をできるとは思えない。

教室内には眠人がなにか答えないと b[オサ]まらないような空気が漂っている。しかたがない。③とぼけたふりで田中に尋ねた。

「変なことを教えるってたとえばどんなことさ」

田中がにやつきながら返してくる。

「*おまわりさん関連だけは教えないでくれよな」

どっと笑いが起こった。小倉先生は苦笑いを浮かべるばかりで、田中をたしなめようとしない。「それって言いすぎ」と田中を非難する声もある。でも④眠人への悪口に加担していないことを表明するためだけの言葉に聞こえた。

こういうとき黙ってはいけない。愛想笑いを浮かべて逃げてもいけない。言葉で殴られた分を、言葉で殴り返してやりたいところだけれど、いい方法とは言えない。

なにか言い返すなら、突拍子もない言葉がいい。加えてちょっと刺激的なほうがいい。否定や弁解は寄ってたかってを生むから、肯定寄りの発言がいい。⑤またとぼけた感じで言ってみる。

「残念だなあ。ぼくがおまわりさんについて教えてやることで、さくら子が警察官になる未来だってあったかもしれないのに。制服が似合ったと思うけどなあ」

クラスメイトが即座に反応する。「さくら子の警官の姿、見てみてえ！」と男子が騒ぎ、「スタイルいいから制服似合いそう」と女子が c[サンドウ]し、田中なんて「さくら子、d[ケイレイ]してみて！」とばかみたいなことを言っている。[Y]の巣を突いたかのような騒ぎだ。みんないとも簡単に人の発言に流される。そして予想した通り、突拍子もなくてちょっと刺激的な発言のほうが、化学変化を起こさせやすい。おかげでそれまでどんなことが話されていたかなんて、みんなきれいさっぱり忘れてしまっている。クラスメイトの視線はすべてさくら子に注がれ、もはや眠人を見ている人は誰もいない。

（関口尚『虹の音色が聞こえたら』）

＊注　三線＝沖縄の楽器。　『じんじん』＝沖縄の童謡。　竜征＝浅倉眠人の小学校からの友人。
おまわりさん関連＝眠人は、夜の公園で三線を習っていたことで、警察官に注意を受けたことがある。

問一　a[　　]～d[　　]のカタカナを漢字に直しなさい。

問二　＝線部 i～iii の語句の本文における意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

i「唐突に」
ア　思いつきで　　イ　ふざけて　　ウ　言葉巧みに
エ　予想に反して　　オ　出し抜けに

ii「茶々を入れる」
ア　感動的な場面に出会って本音を言う　　イ　話の途中に割って入ってひやかす　　ウ　場を盛り上げようとしてあおり立てる
エ　事の展開に対する不満を口にする　　オ　問題にしようとして周囲に働きかける

iii「ばつが悪かった」
ア　腹立たしく思った　　イ　大いに反省した　　ウ　気まずい思いをした
エ　思いがけないことに慌てた　　オ　戸惑いを感じた

問三　[X]・[Y]に適切な語を入れなさい。（ひらがなで書いてもよい。）

問四　――線部①とありますが、小倉先生のこの言葉を受けた眠人の内面をわかりやすく説明しなさい。

問五　――線部②とありますが、「小倉先生の作戦」とはどのようなものですか。わかりやすく説明しなさい。

問六　――線部③・⑤について、後の問いに答えなさい。

(1)　――線部③は、どのようなことを受けてなされた言動ですか。解答欄の形式に合わせて、本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

［　　］ということ。

(2)　――線部⑤の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　――線部③の言動の効果が感じられなかったため、田中やクラスメイトに自分の思いをやんわりと伝えようと思って取った行動である。

イ　――線部③の言動がかえって自分の立場を悪くしたと感じ、田中やクラスメイトの悪ふざけを食い止めようと思って取った行動である。

ウ　――線部③の言動の意図が伝わらなかったため、さらに言葉を継ぎ、クラスの雰囲気を和やかなものにしようとして取った行動である。

エ　――線部③の言動の後、田中をはじめとするクラスメイトの自分に対するさらなる攻撃をかわそうとする意図が込められた行動である。

オ　――線部③の言動の意味を、再度わかりやすく伝え、自分のクラス内の立場は維持しつつ他の生徒にも注目させようとする行動である。

問七　――線部④はどういうことを言っていますか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　調子に乗って眠人をからかう田中に対する適切な注意ではあるものの、それは自分自身に厄介な問題が降りかからないように距離を置くものであって、内心では田中の発言をおもしろがっているように眠人には思われたということ。

イ　クラスメイトの感情を左右するほどの大事な話題を、笑いにすり替えようとする田中の発言に憤りを感じてはいるが、そこには一度注意しておけば自然に雰囲気は落ち着くに違いないという安易な見方がうかがえたということ。

ウ　眠人を批判的に見ており、さくら子を守るために眠人に警告しておきたいと思っていたが、意外にも田中が冗談交じりで適切なことを発言してくれたため、責任感から解放されて安堵しているように眠人には思われたということ。

エ　笑いを誘うような田中の発言ではあるが、そこには眠人の日常的な言動に対する痛烈な批判が込められており、田中と同じ思いを持ってはいても、自分は直接に関わりたくないという意志がクラスメイトに感じられたということ。

オ　田中と眠人が冗談を言い合っても傷ついたりはしない関係であることを知っており、親しい関係にない者は田中と同じように眠人を笑いものにするようなことは控えておこうと思っているような態度がクラスメイトにうかがえたということ。

問八　次に挙げるのは、本文を扱った授業で先生が説明した内容と、その板書です。［Ⅰ］～［Ⅲ］に本文中の適切な言葉を抜き出して入れなさい。ただし、［Ⅰ］・［Ⅱ］は五字以内、［Ⅲ］は十字以内とします。

〈先生の説明〉

小倉先生のことを批判的に見ている眠人ですが、彼も小倉先生と同様のことをしていますね。それは学校内の集団はすぐに［　Ⅰ　］という状態を作って、ある一人に話題の矛先を向けようとするという認識のもとで成り立った行動です。小倉先生も眠人も、その行動の是非はともかく、このような場合にどうすればよいのかよくわかっているようです。眠人の言葉を借りれば、［　Ⅱ　］を引き起こすようにするのです。

このような形で本文を読めば、本文のテーマは「集団としての学校」、それは「［　Ⅲ　］」であると言えそうですね。

〈板書〉

学校内の集団は［　Ⅰ　］という状態を作る

＝「［　Ⅲ　］」

それを避けるための方法

←

集団に［　Ⅱ　］を引き起こす

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（四十点）

学生時代に受けた発生生物学の講義の中で、イギリスに留学経験のある教授が「イギリスではサイエンス（科学）はカルチャー（文化）としての地位を確立している」という話をしたのを憶えています。当時の私は科学と文化は別物と思っていましたし、その言葉の重要性についても意識はしませんでした。しかし国立科学博物館に勤務してからは、昨今の社会における科学のあり方や科学と文化の関係についても考えることが多くなり、現在の日本の社会における「科学」の位置はこのままで良いのだろうかと考え始めました。ここ数年間は、そのことを特に強く意識するようになり、館長になったことを契機に国立科学博物館で「科学を文化に」というミッションを新たに掲げることにしました。

科学と文化の問題を考える時、参考になるのが今から六〇年以上前のC．P．スノーの著作『二つの文化と科学革命』です。スノーは＊ケンブリッジ大学で物理学の博士号を取得した研究者で、技術系の公職に就く傍ら、小説も書くというマルチな才能を発揮した人物です。当時大きな論争を巻き起こしたこの著作は、彼が一九五九年にケンブリッジ大学で行った「二つの文化」というタイトルの講演を元にしたものです。スノーの言う二つの文化とは、「文学に造詣の深い知識人」の文化と自然科学者の文化であり、両者の間には深刻な相互不信と無理解が見られるということを指摘したのです。

ある時パーティで、参加者たちが科学者の無教養を指摘する場面に出会ったスノーは、彼らに＊熱力学の第二法則について説明できるかを訊ねました。しかし誰もが答えられず、むしろそれは恥ずべきことではなく、当然のこととして受け入れていたというのです。スノーは、これは＊シェイクスピアの作品を何か読んだことがあるか、というのと同じレベルの科学上の質問だ、と言います。そして「現代物理学の体系は進んでいても、西欧のもっとも賢明な人びとの多くは物理学にたいして、いわば新石器時代の祖先なみの洞察しかもっていないのである」と指摘したのです。

スノーが持ち出したのがニュートンの万有引力やアインシュタインの相対性理論でなかったのは、うがった見方をすれば、それらであれば

文系知識人でも知っている可能性があると考えたからなのかも知れません。しかし熱力学の第二法則こそが時間の存在のもとになり、宇宙の始まりから崩壊までを予測させる法則であることを考えれば、彼がそれを例として出したことには大きな意味があったのだと思います。

スノーは、政策決定者の多くは科学に無関心で、その素養を欠いているので、正しい科学判断ができていないことを憂慮しました。また彼の意見は自然科学教育を犠牲にしてラテン語やギリシャ語を学ぶことを重要視したイギリスの上流階級の教育システムを非難するものでしたから、大きな論争を呼ぶことになりました。しかしこの人文科学と自然科学の分断が、世界が抱える問題の解決のために科学技術を応用するときに害を及ぼす結果をもたらす、という彼の指摘は現在にもつながるものです。多くの国において科学的な素養や知識を欠いた人たちによって政策が決定されている現状は変わっていません。日本人の研究者には「サイエンスがカルチャーとして認められている」と映ったイギリスの社会でも、政府の政策決定などを間近に見ていたスノーには充分なものとは思えなかったのです。

自然科学と人文科学の乖離は、スノーが言うように基本的には教育システムに根ざすものです。日本の場合は、とりわけ理工系や生命科学の教育が大学受験と強く結び付いているところに問題があります。大学の教養課程がかつてに比べても貧弱なものになっている現在、理科系の大学に進む学生を除けば、科学教育を受けるのは高校までになります。文科系の学部では理科や数学を受験科目に指定していないところも多く、そのような大学に進学する学生は、事実上高校二年生くらいで科学の知識に触れることはなくなってしまいます。しかも、このようなコースを歩む人は非常に多く、大半の日本人の科学的知識は高校時代で止まっています。

当然のことながら科学は進歩します。特に現代では技術の進歩によって自然科学、とりわけ生命科学の分野は驚異的なスピードで発展しています。多くの分野で一〇年もすれば科学的な知見は以前とは違うものになるでしょう。高校時代に憶えた知識は数十年の単位で見れば確実に陳腐化し、通用しなくなるのです。多くの人びとが持つ科学知識が、彼らが社会の中堅にさしかかった頃に時代遅れなものになっているという情況はかなり危機的です。そうなると、科学的な知識そのものに疑念を持つ人も増えることは不思議ではありません。

気候変動や新型コロナ感染症に関する社会の反応などはその最たる例ですが、昨今では科学の専門家の意見が、多くの人びとに届いていないのではないかと感じることが多くなりました。その根底には、人びとと科学の間のこのような関係があることは明らかです。近年、科学

を人びとに届けることの重要性が強く認識されるようになったのは、このような情況を反映しています。その試みのひとつが、＊「はじめに」でも紹介した、非専門家に対して科学的なトピックを伝えることを目指すサイエンスコミュニケーションになります。国立科学博物館でもサイエンスコミュニケーターの養成講座を持っていますし、同じような試みはいくつかの大学でも行われています。これは科学の側から人びとに向かって行われる努力で、現代社会ではその重要性は明らかです。

一方で、サイエンスコミュニケーションの最終的な目標は、研究成果を人々に紹介するだけでなく、その課題や研究が社会に及ぼす影響を科学者と一般の人びとがいっしょに考えて理解を深めることにあります。そのために科学館や研究機関などでは、＊サイエンスカフェや施設の一般公開など様々な試みが行われています。しかし、そもそもこのような催しに参加する人びとは、もともと科学に興味関心を持つ人が多いという事実もあります。多くの人に科学を届けるためには、更に多くの受け手の側の意識も変えていくことも必要なのです。

（篠田謙一『科博と科学　地球の宝を守る』）

＊注　ケンブリッジ大学＝イギリスにある大学。
熱力学＝物理学の一分野。
シェイクスピア＝イギリスの劇作家・詩人。
「はじめに」＝本書「はじめに」において、サイエンスコミュニケーションについて述べている。
サイエンスカフェ＝科学の専門家と一般の人々が、カフェなどの比較的小規模な場所で科学について気軽に語り合う場。

問一　――線部「このような情況」とはどのような「情況」ですか。本文全体をふまえて一五〇字以内で説明しなさい。

問二　あなた自身は、今後、「科学」に対してどのような姿勢でのぞみたいと思いますか。本文の例を用いず、具体的に三〇〇字以内で述べなさい。

（このページで、問題は終わりです。）